

生活世界の概念を活用した地域福祉分析の枠組み

小 野 達 也

【要 旨】

現在、地域では社会生活上のさまざまな問題が生まれている。その解決のためには、新たな理論が求められている。本論文は、ハーバーマスの生活世界の概念を活用して日本の地域福祉を分析するための枠組みを考察したものである。そのために以下の3つのことを行った。第1に、ハーバーマスの生活世界に関する先行研究の整理をした。それをもとに第2に、生活世界の概念を日本の地域福祉で活用する上での理論的な検討を行った。第3に、地域福祉分析のための枠組みを示した。この枠組みは、個人、組織、地域社会という3つのレベルに対して、生活世界やシステムの観点を組み合わせたものである。これにより、それぞれのレベルでの生活世界とシステムに関する現状把握や課題への対応が可能となると考えられる。

1. はじめに

本論文では、ハーバーマス J. Habermas の生活世界の概念を取り上げ、これをわが国の地域福祉で活用するための理論的検討を行う。

近年、日本では雇用や社会保障、医療、教育など、各種の社会制度に問題が指摘され、社会的排除という事象が生じている¹。そうした社会制度から排除された人々の生活上の問題は、その人の暮らしている地域で発現し、そこでの対応が問われている。

その一方で社会福祉の分野だけでなく社会的に分権化の方向が目指され、そのアリーナはいまや市町村よりもさらに小さな地域へと及んできてい

る²。そこでは小学校や中学校という圏域で、住民参加による活動が求められている。

こうした社会的な動向を背景にして地域福祉に対する期待は大きくなってきている。

この時代的要請に応える地域福祉の理論が必要となっているのである。地域の現状を把握し、そこから問題を抽出・分析し、実践の方向性を示していくことがその理論には求められている。筆者は、かねてからハーバーマスの生活世界という概念に関心を寄せてきたが³、ここではその考え方をを用いて実践的な分析を可能とする枠組みをつくるための道を探りたい。ハーバーマスは、先にあげた現状把握－問題の抽出－対応、ということを考える上で豊富な示唆を与えてくれる。すなわち、生活世界とシステムという2層の社会把握、システムによる生活世界の植民地化という問題の提示、生活世界の合理化、さらには公共論といった対応への言及である⁴。無論ハーバーマスの理論をそのまま適用できるとは考えていない。生活世界を日本の地域福祉で活用できるようにするための手入れが必要である。生活世界がどのように論じられているかを把握して、地域福祉で用いるための留意点を確認し、それを適用できるレベルについて考察する。

本論文の構成は以下の通りである。まず、生活世界についての研究動向を確認する。ハーバーマス自身の理論ではなく、ハーバーマスの生活世界がどのように研究されているかをみることで地域福祉への援用可能性を考えようとするものである。生活世界に関するこれまでの論文を取り上げて、何が、どのように研究されてきたのかを明らかにする。次いで、それをもとにして、地域福祉に生活世界の考え方を活用するための理論的な検討を行う。最後に、地域福祉分析のための枠組みを示す。これは、個人、組織・団体、地域社会という3つのレベルと、生活世界とシステムの観点を組み合わせたものである。3つのレベルで、生活世界からの実践がどのように展開できるかも検討していけるような枠組みである。

ここであらかじめ、生活世界からの地域福祉の素描をしておこう。

生活世界からの地域福祉は、地域福祉をシステムのみとして捉えるのではない。地域福祉を目的合理的に追求する体系をシステムとしての地域福祉とすれば、これに対して、地域の人々がつくりだしている生活世界に着目し、その「声」を聞き、そこから地域福祉を構築していくことを目指していくのが、生活世界からの地域福祉である。実際の地域福祉は生活世界からの展開だけでは完結せず、システムとしての地域福祉がもう一つの要件となるのだが、本論では生活世界からのアプローチに絞って取り上げる。

2. ハーバーマスの生活世界にかかわる研究動向

(1) 先行研究の動向

ハーバーマスの生活世界に関して先行研究をレビューして、その基本的動向を確認する。ここでの目標は基本的動向を把握することであるので、関連する全文献を網羅することまではしていない。日本と海外の文献に関してそれぞれ主要な論文検索サイトを使い、検索を行った。

利用した検索サイトは日本の文献（以下、和文献とする。）についてはCiNii、海外の文献（以下、洋文献とする。）についてはSCOPUSである。検索語は「ハーバーマス Habermas」と(AND)「生活世界 lifeworld」を用いて、その両方が含まれるものを抽出した。その結果、CiNiiでは25本、SCOPUSでは72本の該当文献があった⁵。和文献では25本のうち、本文が入手できなかったり、研究論文ではないものを除く22本を検討の対象とした。洋文献については、本文あるいはアブストラクトのどちらもないものを除外して、69本を対象とした。

表1は、5年ごとの発表数である⁶。和文献と洋文献という区別のほかに、ハーバーマスの生活世界の検討を中心とする基礎文献と、生活世界の概念を教育や医療等様々な分野に活用する応用文献に分類した。

その結果、文献数全体としては年を追うごとに増加傾向にあった。ただし、和文献のみに限れば、一時減ってきたものが2006年以降になって増加に転じている。また、基礎文献と応用文献数の変化では、早い時期では基礎文献の

表1 生活世界に関する研究論文の数

	～1990年	1991～1995年	1996～2000年	2001～2005年	2006～2010年
洋文献 (うち 応用文献)	1 (0)	5 (4)	16 (3)	21 (18)	26 (17)
和文献 (うち 応用文献)	6 (0)	5 (0)	3 (0)	2 (1)	6 (5)
計 (うち 応用文献)	7 (0)	10 (4)	19 (3)	23 (19)	32 (22)

和文献はCiNii、洋文献はSCOPUSをもとに筆者作成。検索語は「ハーバーマス Habermas」と(AND)「生活世界lifeworld」。アクセス日はともに2010年8月5日。

方が多く、近年になるに従って応用文献が増えてきている。以上のことから、ハーバーマスの生活世界に関する研究は近年増加傾向にあり、基礎的な検討から、応用的な検討へという展開を確認することができる。

(2) 生活世界の活用

表2 生活世界が活用されている分野

	社会 社会科学 社会運動	哲学 倫理	経済 経営	医療 看護	教育	政治 司法	情報 ジャーナ リズム	福祉
洋文献	20	11	4	17	5	6	4	2
和文献	12	5	0	0	3	0	1	1
計	32	15	4	17	8	6	5	3

生活世界に関する研究の分野別の傾向は表2の通りである。社会科学や哲学分野の文献は多い。しかし、経済、教育そして医療、福祉という分野でも活用されている。とりわけ、医療・看護では分野別には2番目に多い数になっている。ただし医療・看護分野での研究は洋文献のみであり、和文献ではこの分野では活用されていない。

では、生活世界の問題は各分野でどのように使われているのかをより詳しく確認しておこう。日本の文献では、生活世界単独よりは、コミュニケーションの行為との関係で生活世界が言及される場合がある。たとえば、美術

教育での対話型鑑賞というコミュニケーション的行為によって、生活世界の組み換えを図るという実践の報告がある⁷。あるいは学校で逸脱行為をする者に対してインタビューを行い、当事者の意味づけを理解しようという研究もある⁸。また、実証的ではないが、食の変化を生活世界対システムの枠組みで捉えて、食の植民地化を指摘した論文がある⁹。さらに、生活世界とシステムの間に公共圏を設定し、菜の花プロジェクトという一つの市民運動の事例をこの枠組みから検討するという試みが行われている¹⁰。これらをみると日本の研究での生活世界の活用は、いくつかは行われているが、いまだ緒に就いたばかりと考えることができるだろう。

これに対して海外の文献では、生活世界の概念は豊富に使われている。ここで注目したいのは、先にも触れた医療や看護の分野である。患者や家族と医療との関わり合い¹¹や医療関係者の立場を生活世界とシステムから捉えようとするもの¹²はいくつも試みられている。その中には「生活世界の声」と「医療の声」という対抗的な構図が使われているものがある。そうした際の調査ではインタビュー等を行って、生活世界のあり方を分類するという質的な手法が多くみられる。

教育の分野でも生活世界とシステムを用いて教育技術を分析する文献があったり¹³、高等教育について検討したケースがある¹⁴。児童福祉に関しては、コミュニケーションの合理性と関わらせて個人中心の援助計画の導入問題が取り上げられている¹⁵。

対人サービスの分野だけでなく、新聞分析¹⁶や経済¹⁷に関した問題にも生活世界の概念を使った研究がある。新聞では記事について、経済では経済的思考について、それぞれ生活世界とかかわらせて論究している。

研究の対象となるレベルも幅広い。例えば医療の領域では、前述のように個人がシステムとしての医療とどう向き合うかというものから、国レベル(NHS)の政策分析¹⁸もあり、さらにヨーロッパレベルの政策研究¹⁹もある。研究の方法についても実証的なアプローチもあれば、理論検討というアプローチもある。

以上のように、ハーバーマスの生活世界は幅広い分野に様々な方法で活用されている。汎用性の高さが分かる。しかし、それだけにこの概念をどのように理解するかという点では、曖昧さが出ることも考えられる。日本の地域福祉で活用しようとする、再度生活世界の概念を検討して、整理しておく必要がある。

(3) 生活世界をめぐる論点

生活世界の考え方に関する主な論点を、地域福祉を念頭に置いて提示しておこう。基本的性格に関すること、実体と視座、生活世界の変動性、生活世界が抱える問題、生活世界とシステムとの関係という諸点を挙げるができる。

第1は、生活世界が意識哲学か、あるいは間主観性のどちらに関わってくるかという論点である。生活世界の概念が、もともとフッサールによって用いられた際には、主観自体を問い直す意図が込められたものであった²⁰。しかし、ハーバーマスの立場は、独我論的なものではなく、生活世界は間主観的に構成されるものである²¹。これにより、意識哲学とは異なった生活世界の成り立ちを考えることができる。そしてまた生活世界は相互主観の世界に至る了解達成の資源となる²²。

第2に、生活世界を実体（具体的領域）と捉えるのか、それとも視座として捉えるのかという議論がある。この点はハーバーマス自身も両義的であり、その点の理論的瑕疵が指摘されている。栗岡²³は、生活世界とシステムを実体としてしまう問題を3点指摘する。第1に、社会が機能的に統合された全体として理解され、生活世界からの社会統合の視点は失われる。第2に、生活世界がサブシステムの一つとされ、日常世界と同一視される。最後に、了解志向行為と成果志向行為がそれぞれ生活世界とシステムに排他的に帰属するかのような理解になってしまう。こうした点から生活世界とシステムはあくまで社会を考察する2つの視座としている。これに対し、佐藤²⁴や竹内²⁵は、生活世界を実体や領域ととらえている。佐藤にとってはアソシエー

ション、竹内にとっては（いくつかの条件を付けながらも）市民社会が、それを表象している。

第3に生活世界は可変的なものという論点がある。生活世界は自明なものである。日常的には意識にも上らない。しかし、人々のかかわり合いの中で自明であった真理性、規範性、誠実性に対して疑問が付されたときに、当事者間での基礎付けが求められる。これが討議（ディスクルス）であり、それまでの自明性が問い直される。問われた事柄についてコミュニケーション的行為により了解と合意に向かおうとするのであるが、そこでは生活世界の2重の危機があるとされる。ひとつは生活世界の自明性の揺らぎであり、もうひとつはコミュニケーションを行う当事者が自らを疑うということである²⁶。これは生活世界がコミュニケーション的行為により絶えず再生産される動態的なものであるという主張²⁷と重なる。また、生活世界の自明性と非自明性が変転するということでもある。生活世界は間主観的に構成されるのだが、それを突きつめると、個々人の生活世界は全く重なるわけではなく、それぞれにずれている²⁸。であれば、互いのやり取りを行うことでそのずれを確認していくことが重要となる。さらにこのことを意識的に活用できれば、生活世界を組み替えていくことも可能となると考えられる²⁹。

第4は、生活世界自体が問題を抱えているという論点である。ハーバーマースも「歪められたコミュニケーション」という表現を使っており、これは日本社会の中に置き換えて考えることもできると指摘されている³⁰。その歪みは、生活世界そのものに発している。したがって、「実体としての」生活世界に対する批判が「視座としての」生活世界に確保されているか否かが問われることになる³¹。さらに、生活世界を共有しない者とのコミュニケーションの困難性もある³²という論点も出されている。そうした場合、生活世界での排除が生じる危惧があるが、それを越えて、メタコミュニケーションができるかどうかは課題となってくる。これらを踏まえれば、コミュニケーション的行為のありかたによって生活世界の合理性の程度を考えることができるという言及³³は首肯できる。

最後に、生活世界とシステムに関する論点がある。ハーバーマスは生活世界の植民地化を指摘するが、それに対する生活世界の対応をどのように考えられるだろうか。この時に直接にシステムの変革を求めるというアプローチがとられるのではない。システム自体を打破するのではなく、社会文化的生活世界を発展させる、という主張³⁴がある。つまりシステムの外から影響力を行使しようとするものである。その際に、ポイントとなるのは公共圏の考え方であろう。生活世界とシステムを媒介する位置に公共圏を位置づけ、システムを制御することが考えられる³⁵。

3. 生活世界の視座と地域福祉

これまでのことから生活世界とシステムが地域福祉に対して持つ示唆を次のように整理できる。

第1の示唆は地域社会のとらえ方である。ハーバーマスの発想に基づき、地域社会は生活世界とシステムから構成されていると考えることができる。生活世界は、人々が直接かかわり合い、コミュニケーションを行うことでつくられる社会であり、システムは国家行政や市場に代表されるように権力や貨幣という媒体によって形成される目的合理的な社会である。これを意識すれば地域社会を実体としての生活世界とシステムとして捉えることができる。つまり、人びとの直のかかわり合いによる家族や近隣関係、あるいは様々なグループ活動などの生活世界の実体の要素と行政機関や商店、企業というシステムの実体の要素が地域にどのように配置されているのかを調べていくことは可能である。またそれぞれの要素の配置状況やどちらが優勢なのかを考えることで、当該地域社会の性格を把握することもできる。

次に、社会ばかりでなく地域での個人の生活を生活世界とシステムによって把握することができる。私たちは生活世界やシステムを生み出すと同時に、それらを使うことによって生活を成り立たせている。生活世界は意味や人格、社会の再生産に関わり、システムは物質的な再生産に主に関わっている。双方とも生活には欠かすことができないものであり、地域で生活してい

るということは生活世界やシステムを使っているということである。しかし、生活世界とシステムの何をどれだけ使っているかは個人によって異なっている。

第3に地域での問題を、生活世界とシステムの考え方から抽出することができる。システムの要素である行政サービスや商店などが地域に無い場合、あるいは、あっても個人が使えていない場合は、生活上のニーズの不充足になる。ここではシステムからの排除が生じている。生活世界についてもそれが十全に機能していない場合、また、生活世界で個人が差別されている場合には、本来生活世界によって満たされるものが満たされない。生活世界やシステムという考え方をを用いることで、こうした問題状況を把握することができる。

ただし生活は、必要なニーズが満たされるかどうか、だけが問われるのではない。ハーバーマスは、システムが発展した社会で、生活世界の植民地化を指摘している。この生活世界の植民地化は、社会レベルでの事象であると同時に、個々人の生活上の事象でもある。そこでは、生活世界から発せられる生活上の様々な願望等が実現しないこと、つまり主体的な地域生活が送れないことが問題視される。これは、生活世界とシステムのどちらから直接生じるのではなく、両者の関わり合いから生まれてくるのである。

第4に、システムに不都合がある場合にはシステムを変えていく必要があるが、それは究極的にはシステム自体の課題となる。生活世界がそれを直接に変えることはできない。直接変えるのではなく、生活世界が生み出す公共圏を活性化し、それによってシステムに影響を与えることが求められる。公共圏を活性化するには、生活世界自体を高めていく必要がある。

ただし、前述のように生活世界自体が問題を抱えている。システムにより植民地化されていることもあれば、旧来的な考え方や人間関係が残り、個人を抑圧し、差別していることもある。生活世界からの地域福祉はこれらを問題視して、生活世界が既存の体制や価値観に縛られず、弱い立場の人も含めた様々な人々の了解と合意により発展していくことを志向する。それをここ

では「生活世界の高次化」と表現する。

生活世界からの地域福祉の展開では、この生活世界の高次化を目指す。それにより、あらたな公共が形成され、システムに対して影響力を持つようになるという道筋である。

以上これらは、状況の把握－問題の抽出－問題への対応、となっている。次には、これをもとにして、地域福祉分析の枠組みを示す。

4. 地域福祉分析の枠組み

(1) 生活世界とシステムという観点と3つのレベル

表3 地域福祉分析のための観点とレベル

観点 レベル	生活世界	システム	生活世界とシステム の関係	生活世界の高次化
個人	個人が関わっている (属している) 生活世界はどのようなものか	個人が関わっている (活用している) システムはどのようなものか	個人に関わる生活 世界とシステムは どのように関係し ているか	個人が関わっている 生活世界を高次 化するにはどうす るか
組織・団体	生活世界に分類さ れる組織の把握	システムに分類さ れる組織の把握	組織がどのように 運営されているか (生活世界とシス テムから)	組織に生活世界の 視座を反映させる にはどうするか
地域社会	地域社会で生活世 界の要素はどのよ うに配置されてい るか	地域社会でシステ ムの要素はどのよ うに配置されてい るか	地域社会で生活世 界とシステムはど うに関係してい るか	地域社会の生活世 界を高めていくに はどうするか

生活世界の概念を用いて地域福祉の分析をするための枠組みを表3に提示する。これは、観点とレベルを組み合わせることによって地域福祉を分析するための試みである³⁶。

以下では、3つのレベルを設定する。ひとつめは個人のレベルである。これは地域での個人の生活や個人に対する社会福祉援助に焦点を当てるものである。次が、組織・団体のレベルである。地域にある様々な組織のあり方やそれらの活動実践を対象とする。そして3番目が地域社会のレベルである。

これらのレベルは相互にかかわりあっているものであり、そのかかわりあいを把握するにはそれぞれの関連について理解していくことが求められる。それができればより包括的な地域での生活世界とシステムの関係理解となるだろうが、そこに至るにはいくつかの段階が必要となるために、ここではまず各レベルの検討からはじめる。

3つのレベルに関して、「生活世界」、「システム」、「生活世界とシステムの関係」、「生活世界の高次化」という観点を設定する。生活世界はこれまでみてきたように、人びとのかかわり合いやコミュニケーションで成り立つ世界であり、かつ、そのための様々な資源を提供する場である。これが、実体化したものは住民による地域での実践、あるいは、人々のまとまりである住民組織ということになる。システムは、狭義には市場や行政であるが、地域社会においては特定の目的を達成するための様々な社会制度、機関として現れる。

この生活世界とシステムがそれぞれのレベルで関係し合っている。両者は相互に交換関係にあるが、均衡した状態であるわけではない。一般的に近代的な社会では市場や行政というシステムが発展していく。しかし、それによって生活世界が縮小してしまう傾向がある。例えば、行政が地域で広範にサービスを実施すればするほど、住民の諸活動は弱体化していく。地域での直接的な人間関係が衰退してしまったら社会統合に支障が生じるし、地域生活について評価したり、話し合ったりする機会も失われていく。住民の想いが、地域の中で実現していく契機が損なわれてしまう。生活世界とシステムの関係のしかたによる問題を個人、組織、地域社会というそれぞれのレベルで把握することができる。

生活世界を高次化することは、生活世界からの地域福祉が目指すべき方向である。地域での実践の原点は住民の想いが反映される生活世界の視座であり、それを高めていくことを目指す。ハーバーマスはシステムに対抗する方途を生活世界の合理化と表現する。しかし、合理化にとどまらず、生活世界が活性化し、豊かになり、内省がおこなわれ、多様化を認めるようになるこ

とを目指すのが生活世界の高次化である。地域生活のことについて、住民の関心、関与が興り、盛んになり、地域生活のありようが問い直され、多様な配慮が生み出されていくことを求めるのである。この生活世界の高次化により、あらたな公共の形成や自治力の涵養が進み、システムに対する影響力を獲得し、ひいてはシステムを制御することを展望できる。

(2) 分析のレベル

分析の展開としてはまず、実体としての生活世界やシステムを把握する。次に、生活世界とシステムの関係を見る。最後に生活世界を高次化していく方法を検討する。

1) 個人レベル

①個人の生活世界とシステムの把握

ここでの基本となる問いは、個人がどのような生活世界やシステムを使っているのか、である。個人の生活については社会福祉にとっても中心的な関心事項であり、例えば岡村重夫は、社会制度と個人のかかわり（社会関係）に関心を寄せ³⁷、エコロジカルパースペクティブでは個人と環境を一体的に捉えることを主張している³⁸。本論文では、生活を生活世界とシステムという観点から捉える。

これは地域の持っている条件にも左右されるが、同時にその人の生活様式によっても影響を受ける。同じ地域に生活していながらも生活世界やシステムの活用の仕方は一人ひとり異なってくる。具体的に何を、どのように使っているかは、個人をアセスメントすることではじめてわかる。

システムは社会・経済的保障に関するものであり、それが地域では仕事、商店、病院、学校、行政サービス等として具現化される。これらは地域での生活基盤となる。システムから排除されてしまうことは、生活上の困難を意味し、支援の必要性を生み出す。

生活世界に関しては、個人が周囲の人たちと結んでいる関係を見ることに

なる。家族や地域社会、あるいは友人、知人等との関係がその主たるものである。地域での助け合い活動やボランティアとの関係もここに含まれてくる。こうした場は人びとのかかわり合いや直接のコミュニケーションによってつくられており、時にはそれが個人を支える働きもする。

また、地域での社会福祉実践である個人支援についても、この観点から検討することができる。その支援の際にどのような社会資源を活用しているのか、それは生活世界とシステムのどちらに分類されるものかを考えることになる。

②個人レベルでの生活世界とシステムの関係

私たちの生活では生活世界とシステムの両方を使っているが、それが生活においてどのように関係し合っているのかを検討するのが次の作業となる。

生活世界やシステムとつながっていることで地域生活を送ることができる。これにより様々な生活上のニーズを満たしている。ただし、地域生活は、それだけでは十分ではない。そこに、個人の意向がどれだけ実現できているか、が問われる。貨幣や権力という媒体があればシステムによってニーズや必要を満たしていく生活は可能である。しかし、貨幣や権力に依れば依るほどシステムに深く取り込まれた植民地状態になっていってしまう。生活世界がシステムに対して個人の意向を表明し、それを実現していけるだけの関係となっていることが重要となる。個人の生活で生活世界とシステムがどのような関わり合いになっているかを精査することで生活上の課題を見出すことが可能となる。

③生活世界の支援方法

システムによる植民地化やシステムからの排除にいかに対抗していけるのだろうか。生活世界からの地域福祉ではシステム自体を直接変えることを目指すのではなく、個人生活での生活世界を高次化することを目指す。基本的には間主観的に形成される生活世界であるが、それはまた個々人レベルまで

細分化されるものでもある。したがって個人レベルで生活世界の高次化を支援することも可能といえる。高次化の考え方に準じれば、人びとのかかわり合いやコミュニケーションを生み出し、活発にしていくこと。日常的な関係の自明さを問い直しつつ、了解と合意によって、内省化を進めること。それにより生活世界は、少数派や周辺化されやすい人びとの声も取り入れた多様なものとなる。

個人支援の場合には、個人へのエンパワメントがその基盤に置かれることになる。生活世界の高次化の展開を考える上で、エンパワメントの中でも特に重要となるのが、言説の資源という考え方である³⁹。地域で問題を抱える人の中には、自ら声をあげられない人たちもいる。そうした場合には声をあげることができる基盤的な条件（生活の物質的な基盤、時間）、および、ソフト面での条件（他者とのかかわり方、コミュニケーション能力の習得など）を形成することで言説の資源が獲得できる。このことは既存の支援方法に個人を当てはめるという発想では実現し難く、個々の生活世界に即した支援を生み出していかなければならないだろう。個人支援でのコミュニケーションはそのために欠かすことができない。

2) 組織・団体レベル

①生活世界とシステムの観点からの組織・団体の分類

地域福祉の実践には地域にある各種組織の役割を抜きに考えることはできない。地域には福祉団体、当事者組織、住民組織、ボランティアグループ、NPO、サービス提供機関等の各種組織がある。小地域の助け合いグループから、行政や企業まで、その規模や性格の違う多くの組織により地域福祉が進められている。

これらを例えば、社会福祉を主たる目的とする組織と主とはしない組織という基準で区別することはできる。あるいは公・私を意識すれば、政府に属する組織とそれ以外という分け方も可能である。だが、生活世界とシステムを用いることで、人々のコミュニケーションによって生み出され、個々人の

考え方が反映されるという生活世界の特徴と特定の目的を達成するために目的合理的に組み立てられるシステムの特徴によって組織を区別することができる。

本来的には非政府・非市場である生活世界に属するものとしてボランティアグループ、NPO、地域の住民組織などをあげることができる。これに対してシステムに属す組織は、行政組織や各種の専門機関、あるいは介護サービスを提供する営利企業などがある。このように生活世界とシステムという観点によって各組織がどちらの領域に属するかを分けることができる。

②組織での生活世界とシステムの関係

しかし、ここで重要なのは、それぞれの領域に属している各組織が、それぞれの領域の考え方で運営されているとは限らないということである。生活世界に属している組織が、必ずしも生活世界の特徴による考え方で運営されているのではない。例えば、ボランティアグループや地域の住民組織が行政の下請けになっていたり、行政に「動員」されるようになっていけば、それは非政府とはいえなくなる⁴⁰。また、NPOが事業展開に熱心になるあまり市場の論理に取り込まれてしまうこともある。逆に、行政組織や企業でも、そこに生活世界の視座を保持し、それにもとづく運営ができるのであれば、それは生活世界の性格を持っていると見做すことができる。

こうした状況は単に組織の属性によって解明することはできない。それぞれの組織を取り上げて、実際にその組織がどのように運営されているのかを生活世界とシステムという視座から分析を行うことで明らかになる。その作業を通して、組織の内実において生活世界とシステムがどのように関わり合い、どのような地点に抗争ラインを構築しているのかを見出すことができる。

③生活世界を高めるための組織支援

組織にはそれぞれの目的があり、生活世界に属する組織であれば、生活世

界の声を聞き、それが実現していくような活動・事業を展開していく。しかし、上述のように地域の住民組織、NPO等がシステムの論理で運営されるような課題を抱えている場合には、生活世界の特徴を反映できるような組織へと転換していくための方法を検討する必要がある。生活世界の視座を組織に反映できるように組織構成員、利害関係者の実質的な参加を可能とする方向性が求められる。

また、行政組織、専門機関、営利企業等に対しても生活世界の声を取り入れるように働きかけていく。これについても、利用者、市民参加という方法が試みられてきている⁴¹。行政と民間の協働という方法が最も有効性を発揮するひとつは、協働によって行政組織の考え方が変化していくことである。

誤解を恐れず言えば、行政か、営利企業か、NPOかという組織の形式性よりも、それがどのように運営されているのかを問うことの方が重要となる。組織の現れ方は多様であっても、そこに生活世界の視座が反映できるような組織支援の追求が課題である。

3) 地域社会レベル

①地域社会での生活世界とシステムの配置

地域社会の圏域の画一的な設定は困難である。ここでは地域社会を住民参加の実践の単位となりやすい学区や市町村を当面地域社会レベルと設定しておく。

地域社会を生活世界とシステムの概念で分析するには、ソーシャルクオリティの考え方を活用することができる。これについては以前取り上げたので、詳しくはそれを参照していただきたい⁴²。そのポイントは、システムを社会・経済的保障とインクルージョンに分け、生活世界を社会凝集性とエンパワメントに分けて、社会のありようを捉えようとするものである。この考え方は元来ヨーロッパで社会分析のためにつくられてきたものであるが⁴³、これをわが国の地域分析のために援用している。

ソーシャルクオリティを使えば、生活世界とシステムの各要素の配置状況

については捉えやすい。しかし生活世界とシステムの関係や生活世界の高次化という点については、十分に把握できるとはいえない。

②地域社会での生活世界とシステムの関係

地域社会での生活世界とシステムの関係では量的な面からすれば、次のような組み合わせがある。すなわち、第1に生活世界とシステムがともに不十分な状態。この場合は社会という仕組み自体が弱いということであり、生活するためには個人の自助が求められる。次に、生活世界は十分であるが、システムが不十分な状態。これはかつての村落共同体がその典型である。システムが整備されていないために生活世界によってそれをカバーすることになる。ただし、これは単に過去のものとはいえない。社会制度が脆弱化している近年、近隣の助け合いが要請されていることは、この傾向を示しているものといえる。第3に、生活世界は不十分であるが、システムは十分である状態。この場合はシステムを利用する限りは、便利な生活である。これは近代的な生活モデルと言えよう。その一方で住民の関係は弱まっているので、システムが使えなくなった場合には生活上の困難が露呈する。第4に、生活世界もシステムもともに十分な場合である。これは一見もっとも望ましく見える。現にソーシャルクオリティでは、こうした状態が目指される。ただし、生活世界の十分さが、生活世界の高次化によるものか、システムによって強いられたものかどうかを確認する必要がある。

生活世界とシステムのうち、どちらが地域のありように対する影響力を持っているのかを検討することも重要となる。本来生活世界が担ってきた地域活動、地域づくりなどが、行政や企業によって取って代わられ、そのイニシアチブによって進められてはいないか。地域のことを地域の人々の意向で決められるようになっていないか。あるいは逆にシステムが対応すべきことが抑制されていて生活世界によってカバーせざるを得ないという状態にはなっていないか。生活世界はシステムをどの程度制御できるようになっているか、ということが問われなければならない。

③地域社会の生活世界の高次化への支援

地域での生活世界は、様々な問題を持っている場合がある。生活世界の構成要素である伝統や文化は地域社会を維持するうえで重要であるが、同時に、旧来型の権力構造を保持し、新たな考え方や活動を受け入れにくい土壌をつくることもある。こうした状況では、力の弱い人々、旧来型の権力構造の周辺にいるような人々をエンパワメントしていくことはできない。古い生活世界を高次化していくことが地域福祉の推進の基礎となる。

地域社会での生活世界の高次化の構成要素には、活性化、豊富化、内省化、多様化というものがある。活性化は地域での住民のコミュニケーションや実践を活発にすることである。豊富化は、活性化したコミュニケーションや実践が広く地域社会にいきわたっていくことを示す。ここには、それまで声を上げられなかった人たちも含んでいる。さらに、旧来的な生活世界を問い直して、また、自らの考え方や行動を見直して、他者とともに了解と合意に基づくものにつくりかえていくのが内省化である。そして様々な個性ある生き方や少数派の意見を認め合っていることが多様化である。こうした動きが重なり合って生活世界が高次化する。

これを実現するには高次化を生み出すための支援が必要となる。地域での孤立、孤独を生まないような親密圏が形成できるための支援。親密圏の想いを反映できる公共圏を構築していく支援。言説の資源となる、話し合いの場や話し合う条件を整えていくための支援。高次化された生活世界が、システムに対して影響を与えるための支援などである。

5. むすび

本論文は、ハーバーマスの生活世界という考え方の検討を通して、地域福祉分析の枠組みを示した。これにより、個人レベル、組織レベル、地域社会レベルで生活世界の観点をういた分析の可能性を開くことができたのではないかと考えている。ただし、今回は理論的な基礎部分にすぎない。それはまだ入口の段階であり、実際に活用するうえでさらに細部の詰めが必要とな

る。各レベルの調査のための指標も考案できてはいない。具体的に地域の調査を行いながら、この枠組みを実用的なものにしていくことになる。

同時に、現在取り組まれている各地での実践に学ぶことで、この枠組みの適用可能性を高めていくことができるだろう。さらに、調査ばかりでなく生活世界からの地域福祉の新たな実践、特に生活世界の高次化を地域で進めていくことも検討していきたい。

社会的排除や政府主導の分権化の動きが大きく、急になってきている現在、生活世界からの地域福祉の考え方は、それに対するひとつの対抗的な方向性を示していると考えられる。

付記

本論文は、平成22年度科学研究費補助金（基盤研究(C)）「地域福祉に『ソーシャルクオリティ』概念の活用をはかるための調査研究」（課題番号21530594）によっています。

注

- 1 社会福祉でいち早くこの問題を取り上げたのは、次の報告書である。厚生省、2000年「社会的な援護を要する人々に対する社会福祉のあり方に関する検討会」報告書。
- 2 これと歩を合わせるように、地域社会の組織再編も進められようとしている。例えば、総務省、2009年「新しいコミュニティのあり方に関する研究会」報告書。
- 3 小野達也、2009年「生活世界からの地域福祉論への序説」『社会問題研究』58。
- 4 ハーバーマス、1987年『コミュニケーション的行為の理論』下巻、未来社。ハーバーマス、1994年『第2版 公共性の構造転換』未来社。
- 5 作業日は、ともに2010年8月5日である。
- 6 CiNiiとSCOPUSともに、遡及上の限界（過去の全ての論文を網羅し

されているのではない) がある。

- 7 長井理佐、2009年「対話型鑑賞の再構築」『美術教育学：美術科教育学会誌』30。
- 8 増井三夫、宮沢謙市、海野浩、大石義敬、2005年「生徒の日常性をどこまで構成できるか」『上越教育大学研究紀要』25 (1)。
- 9 西村和代、2008年「生活者による『食の主権』回復運動としての食育」『同志社政策科学研究』10 (2)。
- 10 増田和也、沢井智子、門田志乃、加藤良太、2007年「現代の公共圏とコミュニケーションをめぐる一考察」『同志社政策科学研究』9 (1)。
- 11 Leanza,Y , Boivin,I , Rosenberg,E.(2010) “Interruptions and resistance : A comparison of medical consultations with family and trained interpreters” *Social Science and Medicine*,70(12)。
- 12 Sandberg,F.(2010) “Recognising health care assistants’ prior learning through a caring ideology” *Vocations and Learning*,3(2)。また、Hyde,A., et al(2005) “Modes of rationality in nursing documentation” *Nursing Inquiry*,12(2)。
- 13 Sarid,A.(2009) “Habermasian reflections on the question of educational technology” *Policy Futures in Education*,7(6)。
- 14 Luckett,K.(2007) “The introduction of external quality assurance in South African higher education” *Quality in Higher Education*,13(2)。
- 15 Houston,S.(2003) “A method from ‘Lifeworld’ : Some possibilities for person centred planning for children in care” *Children and Society*.17(1)。
- 16 Ketchum.C.(2004) “If a radical screams in the forest, will she be heard? The hegemony of instrumental rationality in news” *Journalism*,5(1)。
- 17 Van Bavel,R., Gaskell,G.(2004) “Narrative and systemic modes of

- economic thinking” *Culture and Psychology*,10(4)。
- 18 Broadbent,J., Laughlin,R., Read,S.(1991) “Recent financial and administrative changes in the NHS” *Critical Perspectives on Accounting*,2(1)。
- 19 Grewal(2010) “Habermas , law and European social policy” *Journal of European Public Policy*,17(2)。
- 20 奥村隆、1989年「社会科学における『生活世界』の概念とその射程」『社会学評論』39 (4)。
- 21 永井彰、1986年「生活世界論の再構成」『社会学研究』50。
- 22 佐藤慶幸、1984年「対話的行為と生活世界」『社会科学討究』30 (2)。
- 23 栗岡幹英、1991年「生活世界とシステム・再考」『ソシオロジ』35 (3)。
- 24 佐藤慶幸、前掲書。
- 25 竹内真澄、1989年「＜社会と国家＞から＜システムと生活世界＞へ」『桃山学院大学社会学論集』22 (2)。
- 26 藤井佳世、2002年「コミュニケーション的行為と他者」『学校教育学研究論集』5。
- 27 永井彰、1997年「ハーバーマスの生活世界論」『東北大学文学部研究年報』47。
- 28 五十嵐沙千子、1994年「ハーバーマスの『生活世界』概念の位置づけ」『哲学・思想論叢』12。
- 29 長井理佐、前掲書。
- 30 栗原孝、1986年「J. ハーバーマスのコミュニケーション行為の理論と現代日本の生活世界」『亜細亜大学経済学紀要』11 (3)。
- 31 永井彰、1986年、前掲書。
- 32 宮本真也、1994年「ハーバマスの生活世界論」『年報人間科学』15。
- 33 永井彰、1997年、前掲書。
- 34 谷和明、1998年「ハーバーマスの社会文化的生活世界概念と社会文化プログラム」『社会文化研究』2。

- 35 増田和也他、2007年、前掲書。
- 36 こうした枠組みの方法については、次の論文を参照のこと。松田亮三、2007年「医療におけるコミュニティ・住民エンパワメント：実践課題分析のための枠組」『立命館人間科学研究』14。
- 37 岡村重夫、1983年『社会福祉原論』全国社会福祉協議会。
- 38 ジャーメイン、ギッターマン、2008年『ソーシャルワーク実践と生活モデル』ふくろう出版。
- 39 斉藤純一、2000年『公共性』岩波書店。
- 40 社会福祉でいえば社会福祉法人は、民間の組織であるが、それは「公の支配に属する」民間であった。
- 41 英国についてではあるが医療への参加政策の例。長澤紀美子、2005年「英国NHSにおける患者・公共参加政策－NPM論を手がかりに－」『高知女子大学紀要社会福祉学部編』54。
- 42 小野達也、2008年「ソーシャルクオリティとは何か？－その基礎的検討」『社会問題研究』57（2）。
- 43 Beck,W.,Maesen,L.J.G.,Thomese,F.,Walker,A.,（2000）*Social Quality: A Vision for Europe*, Kluwer Law International.

A framework for analyzing community-based welfare using the concept of the lifeworld

Nowadays, various social problems are on the rise in Japan, which require a new theory to solve them. This thesis considers a framework to analyze the community-based welfare in Japan by using the concept of Habermas's lifeworld. To that end, the following is performed. First, the previous work is examined closely concerning the lifeworld. Second, a theoretical examination of using the concept of the lifeworld through the community-based welfare in Japan is conducted. Third, the framework to analyze the community-based welfare is shown. This framework combines the viewpoint of the lifeworld and the system with three levels: the individual, organization, and regional society. Thus, it helps in clarifying the situation and associating problems concerning the lifeworld and the system at each of those levels.